

事例 2

コーディネーター名	渡辺 新太郎	活動学校	日光市立轟小学校
コーディネーター歴	3年目	経歴	元教員（高等学校長）

1 コーディネーターを始めるきっかけ

平成 26 年度に学校評議員及び地域教育協議会の委員長に選出されたことがきっかけで、学校から依頼され、コーディネーターとなる。コーディネーターと学校評議員、地域教育協議会委員長を兼ねていることで、より学校の活動を後押しできていると感じている。

2 コーディネート活動の概要

現在は 2 名がコーディネーターとして活動し、それぞれの特性や持ち味を生かして活動している。学校支援ボランティアとの関係性も良好である。

轟小学区の地域性として、学校のために活動することが自然にできる人が多く、地域の人同士のかかわり合いも深い。平成 26 年度には登録ボランティアが 51 名だったが、28 年度には 69 名となり、平成 27 年度は延べ 300 名が学校支援ボランティアとして活動しており、活動は広がりを見せている。

3 コーディネート活動がうまくいくためのポイント

① 学校からの支援

■ 学校の理解

- ・学校は、コーディネーターにもボランティアにも、常に丁寧に対応してくれ、このことがボランティアの意欲や活動の継続につながっている。また、学校長をはじめとして、地域の方々をととても大切にしてくれるという学校の姿勢がある。
- ・地域連携教員（教頭）や学校長が地域に出向いてくれる。また、教職員も同じ姿勢で対応してくれ、学校の対応の素晴らしさを感じている。
- ・地域連携だより、学校だより、HP(300 アクセス/日)などを通して、ボランティアや地域の方による活動を情報発信することをはじめ、感謝の会、ボランティアと子どもたちの会食などを実施し、活動を後押ししてくれている。

② 工夫していること

■ 地域の交流の場づくり

地域には多様な人々があり、文化的水準も非常に高い。平成 27 年度から、学校を会場に、地域の方の専門的な技能を発表する機会として「地域ギャラリー」を実施している。ギャラリーには多くの作品が出品され、学校が交流の場となっている。

■ 学校の応援団

地域の方やボランティアは学校の応援団でありたいと思っている。子どもたちの教育は学校が主であり、学校運営は学校長の権限である。学校支援活動を行うときは、活動内容等について学校と相談し、教育活動を後押しできるようにしたい。



地域ギャラリーの様子

■ ボランティアの確保

若い人への働きかけは、コーディネーターとして限界がある。学校支援や学校と関わりをもつことが自分を表現できる素晴らしい機会であるという良さに気付いてもらうなどの工夫をし、ボランティアの裾野を広げていくことで、活動は継続していくのだと思う。

■ その他

会議等以外での立ち話などのコミュニケーションなども大切な機会である。

4 コーディネーターとしてのやりがい

教員として働いていたこともあり、学校への恩返しの気持ちで活動している。コーディネーターとして活動していると、地域のことがよくわかり、自分の視野が広がると感じる。また、活動を通して、地域の方々みんながもっている「学校の役に立ちたい」という思いを大切にした上で、具現化できることにやりがいを感じている。以前、研修会で聞いた「地域の中の大切なものをなくさないように」という言葉の意味が今はよく分かるようになった。

コーディネーターとして活動することで、地域教育協議会を本来の目的どおりに運営し、よりよくすることもできるので、そこも魅力の一つである。

5 活動上の課題

現在、特に課題と感じていることはないが、学校の応援団として、まず自分ががんばれるようにしていきたい。

6 その他

○学校長より

- ・コーディネーター、ボランティア、地域の方に学校を支えてもらっている。
- ・管理職として、地域と連携した活動の維持と今後の向上、地域の想いを汲んだオリジナリティーのある取組等に力を入れている。また、多くのボランティアの活動を地域連携だよりやHP(学校長が更新)で随時情報発信している。
- ・地域の方々に子どもたちとかかわってもらうことは、コミュニケーション力の向上を含め、子どもたちの成長にとっても大切である。
- ・地域と連携した活動を通して、地域の想いと学校の願いを地域と学校が一緒になって考えることができる。
- ・学校を核としたコミュニティの大切さを感じている。形だけではなく、心のつながりが大きい。活動の積み重ねが互いの信頼関係になっていく。
- ・コーディネーターの存在がとても大きい。教職の経験があり、学校への理解が深い方をお願いすることができ、学校の応援団としてふさわしい方である。